



雨男



川崎ゆきお

雨の降る日は人出が少なくなる場所がある。屋内でも そうだ。家からずっと屋根が続いており、傘など差さなくても行ける場所なら別だが。たとえば屋根のある駐車場、地下でもいい。そして目的地も屋根のある駐 車場なら、濡れることはない。ただ、そんな条件のそろった場所は滅多にないし、行き先により、そんな屋根は期待できない。

「今朝は出席率が低いようすなあ」

毎朝喫茶店で集まっている年寄り達の会話だ。

「山田さんは雨なら来ませんよ」

「そうでしたなあ」

「大黒さんは半々です。降り方にもよります」

「そうでしたか。あの人は晴れていても来ない日があるので、雨とは関係ないのかもしれないぞ」

「ああ、なるほど。しかし、この喫茶店、雨だと客が少ないです。やはり雨の影響は大きいと見るべきでしょう」

「私なんて、台風が来ていても、傘が差せば来ますよ」

「他の人は雨で濡れるのがいやなんでしょうかね」

「それもありますが、雨の日は出たくないのでしょ。気分も低気圧ですしね」

「そうですねえ。今朝のような真冬の雨は冷たいです。それに湿気が強いので、体もだるいですし、やはり元気が削がれますよ」

「身を削ってまで来るようなことじゃないですからなあ」

「そうですねえ。これが仕事なら、雨でも雷でも行きますがねえ」

「まあ、天気の悪い日、うろうろするのは体にも悪いんでしょう。雨の日、持病が出る人もいるでしょうから」

「そうですねえ」

「私は多少体調が悪い日でも来てます」

「そうですか。私も風邪程度なら、来てます」

「しかし、今朝はどうやら二人だけのようすなあ」

「まあ、雨を押しつけてまで来るような集まりじゃないですしね」

「はいはい」

雪に強いので雪男。雨に強いので雨男。というわけではない。

了